DANCE REFLECTIONS BY VAN CLEEF & ARPELS

PRESENTS
A FESTIVAL WITH

KYOTO EXPERIMENT

SAITAMA ARTS THEATER

ROHM THEATRE KYOTO

KYOTOGRAPHIE

Kyoto
Saitama
Oct. 4
— Nov. 16
2024

PRESS KIT

はじめに

ニコラ・ボス

ダンス リフレクションズ by ヴァン クリーフ&アーペルは、毎年世界各地で催してきたモダンダンスとコンテンポラリーダンスのフェスティバルを、イニシアチブの発足以来初めて、京都と埼玉で開催いたします。2023年、ヴァン クリーフ&アーペルは、日本進出50周年という節目を迎えました。日本は今もなお、メゾンが積極的に活動を展開している国であり、当イベントは、日本とヴァン クリーフ&アーペルが築き上げてきた豊かな文化交流の歴史を受け継ぐものとなります。

ヴァン クリーフ&アーペルは1906年、世界が極東へ強い関心を向け、芸術的親和性が高まっていた時代のパリに誕生しました。1920年代以降、ヴァン クリーフ&アーペルが手掛けたジュエリーや貴重なオブジェといったコレクションの一部には、形状、技巧、素材、象徴的イメージにおいて日本文化の影響がうかがえます。1970年、メゾンは大阪で開催された日本万国博覧会に出展し、その3年後には日本初となるブティックをオープンしました。以来、著名な日本人アーティストとの数多くのコラボレーションを通し、2つの文化の間の対話は、より豊かなものへと着実に発展しています。

ヴァン クリーフ&アーペルは2004年以来、パピヨン クリップの装飾を漆芸作家である箱瀬淳一氏に依頼しています。メゾンを象徴する作品のひとつであるパピヨン クリップの左右の羽は、私たちが受け継いできた2つの伝統、すなわち、ジュエリーと日本の漆芸の出会いを表現しています。2017年に開催された京都国立近代美術館主催の「*技を極める―ヴァン クリーフ&アーペル／ハイジュエリーと日本の工芸*」展では、ハイジュエリー、明治時代の名作、日本の現代工芸のつながりが紹介され、私たちが所蔵するパトリモニーコレクションからの約270点と日本の作品63点とが対話を交わすように美しく響き合っていました。蜷川実花氏による色鮮やかな写真と花をモチーフとするメゾンのクリエーションを展示した「*Florae*」展（2017年）では、建築家の田根剛氏が光を巧みに操り、没入感溢れる空間を創出しました。また、東京と京都で開催された「*Light of Flowers*」（東京2021年開催、京都 2022年開催）では、華道家の片桐功敦氏によるいけばなの芸術性と、ヴァン クリーフ&アーペルが自然から得てきたインスピレーションのつながりが表現されました。

さらに最近では、2023年、「*友禅*」の重要無形文化財保持者（人間国宝）・染織家の森口邦彦氏との貴重な交流の機会を得ることができました。日本古来の染色技巧とハイジュエリーの素材や技巧との融合により誕生した2つのプレシャスボックスは、「*紅白*」と「*玄*」と名付けられ、メゾンの日本進出50周年を記念して東京で初公開されました。これら2点の作品は、2024年にパリのパトリモニー ギャラリー（20 Place Vendôme）で開催された「*ヴァン クリーフ&アーペルと日本：芸術的出会い*」展（1月19日～6月17日）でも展示されており、こうした2つの文化の交流が今日に於いても実り多きものであることを示しています。

漆芸からデザイン、写真、*いけばな*、*友禅*に至るまで、インスピレーションに満ちたこの交流のレガシーは今年、メゾンが創立以来愛着を抱き続けてきた芸術であるダンスを中心に、さらなる発展を遂げます。2020年のダンス リフレクションズ by ヴァン クリーフ&アーペルの創設以来、メゾンは振付芸術とのつながりをより一層深めるべく注力してきました。メゾンの伝統を礎とする当フェスティバルは、ロンドン、香港、ニューヨークに続き、初となる日本での開催を機に、貴重な芸術的シナジーを世界へ向けて発信します。

ニコラ・ボス
ヴァン クリーフ&アーペル プレジデント兼CEO

© Van Cleef & Arpels SA 2024

はじめに

セルジュ・ローラン

ダンスを支援すべく2020年に始動したダンス リフレクションズ by ヴァン クリーフ&アーペルは、創造、教育、継承という3つの本質的価値を体現するプログラムです。パートナーシップによって結ばれた幅広いネットワークにより、振付家と団体を支援するとともに、例年開催のダンス フェスティバルを実現しています。ロンドン（2022年3月）、香港（2023年5月）、ニューヨーク（2023年10月）に続き、2024年10月4日から11月16日まで、このフェスティバルを京都と埼玉にて開催いたします。公演をはじめ、アーティストとの交流イベント、どなたでも参加できるワークショップ、さらに今回、関連イベントとして開催される写真展を含めた本フェスティバルが、KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭、彩の国さいたま芸術劇場、ロームシアター京都とのコラボレーションを継続するとともに、日本の皆さまにコンテンポラリーダンスの世界を広くご紹介する機会となることを願っています。

当イベントは、アメリカ人写真家、オリヴィア・ビー氏の写真展「*その部屋で私は星を感じた*」によって幕を開けます。KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭とのコラボレーションによって展示される当エキシビションでは、過去のフェスティバルの最も美しい瞬間を捉えた写真が展示され、動きの芸術が描き出す瞬間的なビジョンを浮かび上がらせます。このフェスティバルの精神に触れる入り口となるにふさわしいものとなっています。

日本向けのプログラムは、現代の作品をご紹介しながら、歴史を参照するアプローチを軸に構想されています。オラ・マチェイェフスカ氏は、「*ロイ・フラー：リサーチ*」と「*ボンビックス・モリ*」とによって、ダンスの伝統と偉業を振り返る機会を観客に提供しています。両作品は、サーペンタインダンス（1892年）と呼ばれるロイ・フラー創案の布と光がうねるように動くダンスを探求すべく、彼女が取り組んだ研究を基にして制作されています。一方、アレッサンドロ・シャッローニ氏はイタリア・ボローニャ地方で継承される一連の作品群を「*ラストダンスは私に*」で探求しています。

このような過去を振り返る視線は、彼らの独創的な構成や革新的なアプローチを通して、ダンス表現の発展に貢献した現代の作品を紹介することにもつながります。「*ソープオペラ、インスタレーション*」（2014年）は、ダンスとビジュアルアートの密接な関連性を見事に描き出した作品です。本作において、マチルド・モニエ氏とドミニク・フィガレラ氏は、表象規範に問いを投げかける瞬間的な振付と造形芸術について熟考するよう観客を促します。続いて、クリスチャン・リゾー氏が、イスタンブールの路上で男性たちが即興で踊るフォークダンスを見たことをきっかけに乗り出したリサーチを追います。アーティストは、民間伝承から得た彼らのインスピレーションを基に「*D'après une histoire vraie—本当にあった話から*」を2013年に制作しました。

さらに、今回のフェスティバルで発表される近年の作品は、振付家の独創的な才能を証明するものです。日本初演となる（ラ）オルドーマルセイユ国立バレエ団は、ダンスとエレクトロニックミュージックを融合させたユニークな世界との類例のない出会いを描き出す「*ルーム・ウィズ・ア・ヴュー*」を披露します。ナレーション、サーカス芸、コンテンポラリーダンスをひとつにした「*Corps　extrêmes—身体の極限で*」では、ラシッド・ウランダン氏が、優れた身体能力と動作の詩的な側面を組み合わせたアクロバティックな作品を提示します。フェスティバルの最後を飾るのは「*カルカサ*」です。作品内でマルコ・ダ・シウヴァ・フェレイラ氏は、ヴォーギングの脚さばきとハウスミュージック　を、フォークダンスを基にした動きと組み合わせた大胆な表現を展開しています。

今回のダンス リフレクションズ by ヴァン クリーフ&アーペル フェスティバルは、日本のパートナーの方々とのコラボレーションにより実現しました。心より感謝申し上げます。本イベントが、さまざまな芸術分野が交差することでさらなる発展を遂げる振付芸術との出会いの場となることを願っています。

セルジュ・ローラン
ヴァン クリーフ&アーペル ダンス&カルチャー プログラム ディレクター

© Van Cleef & Arpels SA—Marc de Groot

目次

公演 5
ラストダンスは私に 6
ルーム・ウィズ・ア・ヴュー 7
ボンビックス・モリ 8
ロイ・フラー：リサーチ 9
D'APRÈS UNE HISTOIRE VRAIE—
本当にあった話から 10
ソープオペラ、インスタレーション 11
CORPS EXTRÊMES—身体の極限で 12
カルカサ 13

ワークショップ 14
ルーム・ウィズ・ア・ヴュー 15
ラストダンスは私に 16
ボンビックス・モリ 17
D'APRÈS UNE HISTOIRE VRAIE—
本当にあった話から 18
ソープオペラ、インスタレーション 19
CORPS EXTRÊMES—身体の極限で 20

写真展 21
その部屋で私は星を感じた 22

パートナー & 共同主催 23

アーティスト略歴 28

カレンダー 33

会場&ご予約 35

制作クレジット 37

公演

カルカサ / © Guidance

ラストダンスは私に

アレッサンドロ・シャッローニ

京都芸術センター（講堂）

10月5日、6日 / 午後4時

作・演出
アレッサンドロ・シャッローニ

出演
ジャンマリア・ボルジッロ、ジョバンフランチェスコ・ジャンニーニ

美術協力
ジャンカルロ・スタニ

音楽
アウローラ・バウザ、ペーラ・ジョウ（TELEMANN REC.）

衣装演出
エットレ・ロンバルディ

技術監督
ヴァレリア・フォティ

ツアー技術
コジモ・マッジーニ

キュレーション、プロモーション、コンサルティング
リザ・ジラルディーノ

運営・制作総指揮
キアラ・ファヴァ

広報
ピエルパオロ・フェライノ

会場
京都芸術センター（講堂）

上演時間
30分

チケット予約
KYOTO-EX.JP

KYOTO EXPERIMENT

「ラストダンスは私に」は、イタリアのフォークダンスであるポルカ・キナータを探究したアレッサンドロ・シャッローニの作品です。ポルカ・キナータの歴史は、1900年代初期まで遡ります。一般的に男性によって踊られる求愛のダンスであり、抱擁や回転、床に跪くといった動作が含まれます。シャッローニは、かつて人気を博したものの現在では消滅の危機に瀕するこの伝統舞踊の復興と普及を目指し、デュエットパフォーマンスに加え、継承を目的とした一連のワークショップを構築しました。

ポストパフォーマンストーク
10月6日の公演終了後、アーティストが作品について語るポストパフォーマンストークが予定されています。

ワークショップ
10月6日に出演者によるワークショップが開催されます。
16ページ参照

© MAK

ルーム・ウィズ・ア・ヴュー

(ラ) オルド、ローン
withマルセイユ国立バレエ団

ロームシアター京都 (サウスホール)

10月5日、6日 / 午後6時

アーティスティック
コンセプト
ローン、(ラ) オルド

音楽
ローン

演出・振付
(ラ) オルド — マリーン・ブルッティ、ジョナタン・デュブルワー、アルチュール・アレル
およびマルセイユ
国立バレエ団
(出演者は後日確定)

照明
エリク・ヴゥルッツ

舞台デザイン
ジュリアン・ペセル

衣装デザイン
サロメ・ポルーデニ

ヘアスタイリング
シャリー・ル・マンデゥ

リハーサル監督
ヴァレンティーナ・パッチェ

美術アシスタント
ジュリアン・ティコ

照明デザイン アシスタント
ギャスパー・ジュアン

音響技術
ヴァサン・フィリッパー

衣装アシスタント
サンドラ・ポンポニオ

舞台監督
ジュリアン・パラ

ステージマネージャー
セシル・ヨンゲティエス・マンガレット、セバスティアン・マテ、アントワン・カハナ

会場
ロームシアター京都
(サウスホール)

上演時間
80分

チケット予約
KYOTO-EX.JP

KYOTO EXPERIMENT

2020年、フランス・パリのシャトレ座において、アーティストのローンと共同で制作された *ルーム・ウィズ・ア・ヴュー*は、(ラ) オルドが16か国28名のダンサーで構成されるマルセイユ国立バレエ団と組んだ初の振付作品です。大理石採石場を舞台に、さまざまな機械が切り出しや研磨のために駆動する中、作品が展開されます。舞台に創出された異空間で、ローンは機器を駆使し電子的でありながら感情に訴えかけるような壮大な光景を生み出し、一群のダンサーがそこでパフォーマンスを繰り広げます。ミケランジェロの言葉にあるように、彫刻家が大理石を彫り「塊に閉じ込められた人間の像を解放」しようとするのに対し、パフォーマーたちは大理石という不動の白い物質性から逃れようとして踊ります。彼らは、迫りくる惨事の限りなく人間的な外形を見極めるために立ち上がり、そこにある美の可能性そのものを思い描こうとしているのです。

(ラ) オルドは、ダンスを通じて、抗議や反逆の表現を模索し続けています。「*ルーム・ウィズ・ア・ヴュー*」は、まさに白紙のような作品です。プレーンな白いキューブとして考案された空間であり、そこに音、物体、イメージを刻み込むことで、人間の変わり続ける役割についての熟考を促します。ローンの5枚目となるスタジオ・アルバム「*ルーム・ウィズ・ア・ヴュー*」は、この作品から誕生しました。彼が操る機器からサウンドが響き渡る独創的なパフォーマンスは、人類そのものをはるかに超えて存在する歌に向かって、私たちを解き放ち、消えゆく線を辿るように誘います。

ポストパフォーマンストーク
10月6日の公演終了後、アーティストが作品について語るポストパフォーマンストークが予定されています。

ワークショップ
10月4日に出演者による特別ワークショップが開催されます。
15ページ参照

© Cyril Moreau

ボンビックス・モリ

オラ・マチェイェフスカ

ロームシアター京都（ノースホール）

10月11日 / 午後7時
10月12日 / 午後4時30分

振付
オラ・マチェイェフスカ

出演
ジャン・レスカ、
リア・マロイェヴィッチ、
マチェイ・サド

音響
カロラ・カッジャーノ
ダンサーとのコラボレーション

照明・技術監督
リマ・ベン・ブライム

サーペンタインダンス構想設計
ヨランタ・
マチェイェフスカ

サーペンタインダンス構想具現化・衣装
ヴァラニタン・ソレ

制作・運営
「SO WE MIGHT AS WELL DANCE」―
キャロリン・レジィ

ツアーマネージャー
カプシーヌ・ゴワン

会場
ロームシアター京都
（ノースホール）

上演時間
60 分

チケット予約
KYOTO-EX.JP

KYOTO EXPERIMENT

オラ・マチェイェフスカによる3人のダンサーのための本作品は、ロイ・フラーが1892年に考案したサーペンタインダンスからインスピレーションを得て制作されました。マチェイェフスカは、この伝説的なダンスを、自らのうちにある矛盾とつかみどころのない性質に向き合わせています。タイトルの「ボンビックス・モリ」は、生存のために完全に人間に依存するようになった蚕を指しています。このパフォーマンスでは、ダンス、過去の記録、技巧性が織り交ざり、諸物のハイブリッドな性質についてのメタファーを生み出します。

ロイ・フラーは、型にとらわれることのない先駆的なダンサーであり、パフォーミングアーティストという呼称が生まれる以前から、それを体現する人物でした。西洋のダンス界にあって物議を醸す存在であった彼女は、たっぷりとしたシルクの布の下に身体を隠し、ダンスを特殊効果に溶け込ませて、火、水やそのほかの自然の要素の動きを表現しました。フラーは、舞台で初めて電気照明を使用し、人体以外の動きを探求することで、演劇やダンスの世界に革新をもたらしたのです。また彼女は、オーギュスト・ロダン、リュミエール兄弟、アンリ・ソヴァージュ、マリー・スクウォドフスカ=キュリーといった傑出した人物たちとのコラボレーションを実現しています。

ポストパフォーマンストーク
10月12日の公演終了後、アーティストが作品について語るポストパフォーマンストークが予定されています。

ワークショップ
10月9日には出演者たちによる特別ワークショップが開催されます。
17ページ参照

© エリック・ホン

ロイ・フラー：リサーチ

オラ・マチェイェフスカ

京都芸術センター(講堂)

10月14日 / 午後6時30分

構想・振付
オラ・マチェイェフスカ

出演
オラ・マチェイェフスカ、
ジャン・レスカ
と交代

ダンス構想設計
ヨランタ・
マチェイェフスカ

制作・運営
キャロリン・レジィ

ツアーマネージャー
カプシーヌ・ゴワン

会場
京都芸術センター
（講堂）

上演時間
40 分

チケット予約
KYOTO-EX.JP

KYOTO EXPERIMENT

「ロイ・フラー：リサーチ」は、ロイ・フラーが創作した有名なサーペンタインダンスを甦らせるものです。彼女は、振付に何メートルもの絹地を取り付けた竹の棒を取り入れてダンスと特殊効果を融合させ、炎、海の波など自然現象へと自身の姿を変えてみせることで、西洋舞踊の伝統に一石を投じました。マチェイェフスカは作品の中で、神話的なアイコン、その矛盾、そして、追跡不可能なものと対峙します。身体を通してダンスをアーカイブ化することにより、この作品は、振付の歴史、その継承と解放に、独自の視点をもたらします。

© エリック・ホン

D'APRÈS UNE HISTOIRE VRAIE—本当にあった話から

クリスチャン・リゾー

京都芸術劇場 春秋座
10月12日 &13日 / 午後7時
彩の国さいたま芸術劇場（大ホール）
10月19日 / 午後7時
10月20日 / 午後3時

構想・
振付・
舞台美術・
衣装
クリスチャン・リゾー

ダンサー
ユネス・アブラクル、
ファビアン・
アルマキエヴィッチ、
ヤイル・バレリ、
マッシモ・フスコ
あるいは
ニコラ・ファヨル、
ペップ・ガリゲス、
ケレム・ゲレベック、
フィリペ・ロウレンソ、
ロベルト・マルティネス

クリエーション
ミゲル・ガルシア・
ロレンス

原曲
ディディエ・アンバクト&
キングQ4

ライブミュージック
ディディエ・アンバクト&
キングQ4

照明デザイン
キャティ・オリーブ

美術アシスタント
ソフィー・ラリー

ジェネラルマネージャー
ジェローム・マソン

照明マネージャー
ロマン・ポルトラン

音響マネージャー
デルフィーヌ・フアサット

音響アレンジ
ヴァネッサ・コート

制作・ツアーディレクター
アンヌ・フォンタネージ

制作・ツアー
アン・バウツ

会場
京都芸術劇場 春秋座、
彩の国さいたま芸術劇場
（大ホール）

上演時間
60分

チケット予約
KYOTO-EX.JP
SAF.OR.JP/T/

8人のダンサーと2人のドラマー。「男らしさ」という悪徳にとらわれた10人の男性たち——約10年前、「*D'après une histoire vraie*—本当にあった話から」は、優雅で情熱的な動きによって不安を一つずつ打ち砕きながら、両極を抗いがたく行き来するような流動性への扉を開きました。パフォーマーたちにはここで、伝統と現代性の分裂を繊細に解消する振付作品を再展開することが求められます。感情の記憶を白熱の頂点へと導き、題材を限界まで引き伸ばすような、極めて重要な作品です。大地のリズムと波打つ身体との摩擦の中で、ダンスは自らの身体性を探求し続けます。音楽と歩調を合わせながら、部族の儀式から幾何学的な形、虚構から抽象、グループからコミュニティへと広がっていくのです。しかし、土地をもたない人々の民話が浮かび上がるのは、常に他者の存在に支えられて結束を固める、運動という秘密裏に結ばれた連帯を通じてなのです。ダンサーたちは、絶え間なく繰り返される接触に反応して倒れ、差し伸べられた手の心地よさに駆け寄り、心を込めて握り締めます。ひとりでいたかと思うと、結びついては離れ、そして、再び結びつきます。連帯感？ これは、非常に切実な問題なのです。

テキスト © ノエミ・シャリエ

ポストパフォーマンストーク
10月13日の京都芸術劇場 春秋座、10月20日の彩の国さいたま芸術劇場での公演終了後、アーティストが作品について語るポストパフォーマンストークが予定されています。

ワークショップ
10月13日に京都芸術劇場 春秋座、10月18日に彩の国さいたま芸術劇場で出演者による特別ワークショップが開催されます。
18ページ参照

© マーク・ドマージュ

KYOTO EXPERIMENT
SAITAMA ARTS THEATER
京都芸術劇場

ソープオペラ、インスタレーション

マチルド・モニエ & ドミニク・フィガレラ

ロームシアター京都（ノースホール）

10月18日 &19日 / 午後7時
10月20日 / 午後4時

構想
マチルド・モニエ
& ドミニク・フィガレラ

振付
マチルド・モニエ

ビジュアルアート
ドミニク・フィガレラ

ダンサー
イハン・リン、ヴィルジル・ダニョー、チアゴ・グラナート、ジョナタン・プランラス=デスクール

舞台協力
アニー・トルテ

音響
オリヴィエ・ルヌフ

照明
エリック・ウルツ

衣装デザイナー
ローレンス・アルキエ

ジェネラルマネージャー
ティエリー・カプレラ

会場
ロームシアター京都
（ノースホール）

上演時間
45分

チケット予約
KYOTO-EX.JP

KYOTO EXPERIMENT

「ソープオペラ、インスタレーション」は、振付家マチルド・モニエと画家ドミニク・フィガレラが2009年に共同制作した振付作品「ソープオペラ」の新バージョンです。

2人の継続的なコラボレーションを証明するこのバージョンは、より造形的でパフォーマンス性に富んだものとなっています。マチルド・モニエとドミニク・フィガレラは、オリジナル版で使用した泡という素材を、パフォーマンス空間の中心に置き換えることを構想しました。この素材は、途方もないスケールのボリュームへと変化し、空間全体に徐々に広がりゆく動く物体を形成しながら、伝統的な舞台を白い箱に作り変えます。出現する形状は壁に掛けられるものではなく、リアルタイムで扱われるとともに消えていきます。パフォーマンスは、ドラマチックな緊張感をもって繰り広げられ、やがて泡が消え、ダンサーだけがステージに残る瞬間へと至るのです。

ポストパフォーマンストーク
10月20日の公演終了後、アーティストが作品について語るポストパフォーマンストークが予定されています。

ワークショップ
10月19日に出演者による特別ワークショップが開催されます。
19ページ参照

© マルク・クードレ

CORPS EXTRÊMES—身体の極限で

ラシッド・ウランダン／シャイヨー国立舞踊劇場カンパニー

彩の国さいたま芸術劇場（大ホール）
10月26日 / 午後7時 10月27日 / 午後3時
ロームシアター京都（サウスホール）
11月2日 / 午後7時 11月3日 / 午後3時

構想
ラシッド・ウランダン

出演
キャスト（現在進行中）

音楽
ジャン＝バティスト・ジュリアン

映像
ジャン＝カミーユ・ゴイマール

照明
ステファン・グライヨ

衣装
カミーユ・パニン

技術マネージャー
シルヴァン・ジロドー

ツアーマネージャー
ジュリエット・ボーンズ

翻訳
カミーユ・アサフ

制作
シャイヨー国立舞踊劇場

会場
彩の国さいたま芸術劇場（大ホール）、ロームシアター京都（サウスホール）

上演時間
60分

チケット予約
SAF.OR.JP/T/
ROHMTHEATREKYOTO.JP/TICKETS/GUIDE/

SAITAMA ARTS THEATER

ロームシアター京都
ROHM Theatre Kyoto

*「CORPS EXTRÊMES—身体の極限で」*は、ラシッド・ウランダンが抱く「飛行、無重力、宙づり、飛翔といった概念が引き起こす魅惑に焦点を当てたい」という願望から着想を得ています。ハイライナーとクライマーという2人の象徴的なエクストリームスポーツを愛するスペシャリストが、いつもの遊び場からは遠く離れた舞台で、8人のアクロバットパフォーマーと出会います。

身軽で回転も自在な、自由を愛するこの並外れたコミュニティは、天と地の間で進化を遂げます。メンバーたちは、さまざまな方法でイカロスの夢を今日の世界に甦らせるのです。舞台の奥には、支点となる印象的なクライミングウォールがあります。上空に長いロープが張られたステージは、時に巨大なスクリーンと化し、壮大な自然の風景の中でエクストリームスポーツのアスリートたちがパフォーマンスを繰り広げる、文字通り目もくらむようなイメージが映し出されます。

比類ない2人のアスリートによるナレーションも重要な役割を果たしており、それぞれが自分たちの活動について個人的な視点で語ります。ジャン=バティスト・ジュリアンが手掛ける音楽は、時に高揚感を与え、時に熱狂を誘発するような調子で、多層的で繊細に感情をゆさぶるこの作品をより一層盛り上げます。

この作品は、単に超絶技巧の魅惑に身を任せるものではなく、虚空と戯れながら、ダンスの実存的、さらには形而上学的な側面を深く掘り下げ、明らかにしていきます。現実に根差しながらも夢のようであり、親密でありながらも壮大なこの作品は、人間の並外れた体験に際立って芸術的な光を当てています。

ポストパフォーマンストーク
10月27日の彩の国さいたま芸術劇場、11月3日のロームシアター京都での公演終了後、アーティストが作品について語るポストパフォーマンストークが予定されています。

ワークショップ
10月27日に彩の国さいたま芸術劇場で、10月29日と30日にロームシアター京都で出演者による特別ワークショップが開催されます。
20ページ参照

© パスカル・ショレット

カルカサ

マルコ・ダ・シウヴァ・フェレイラ

ロームシアター京都（サウスホール）

11月15日 / 午後7時
11月16日 / 午後3時

会場
ロームシアター京都
（サウスホール）

上演時間
75分

チケット予約
ROHMTHEATREKYOTO.
JP/TICKETS/GUIDE/

ロームシアター京都
ROHM Theatre Kyoto

「カルカサ」では、マルコ・ダ・シウヴァ・フェレイラを含む10人のダンサーと2人のミュージシャンという多彩なキャストが、型にはまらない陽気なコール・ド・バレエ（群舞）を形成しています。彼らは、スタンダードな民族舞踊と、マイノリティとみなされてきた文化から生まれた現代的なアーバンダンスのスタイルを融合させた複雑な脚さばきを披露します。この振付において、マルコ・ダ・シウヴァ・フェレイラは、コミュニティ、集団的アイデンティティの構築、記憶、文化の結晶化を研究するためのツールとしてダンスを用いています。
出演者たちは、身体、ダンス、文化構築の、肉体的かつ直感的で気取らない流れの中で、このアイデアを探求します。彼らは、クラブ、舞踏会、スタジオから引用した馴染みのあるフットワークからこの探索を始め、現代の社会的、都市的コンテクストの身体的語彙（ハウス、クドゥーロ、トップロック、ハードスタイルなど）　をアイデンティティの語彙として使用します。ゆっくりと構造化された構築プロセスを通じて、彼らはこれらのスタイルを過去のダンスの遺産や記憶に結び付けるのです。

美術監督・振付
マルコ・ダ・シウヴァ・フェレイラ

美術アシスタント
カタリナ・ミランダ

ダンサー
アンドレ・ガルシア、レオ・ラモス、マーク・オリベラス・カサス、マルコ・ダ・シウヴァ・フェレイラ、マルコ・タバレス、マリア・アントゥネス、マックス・マコウスキー、メラニー・フェレイラ、ネルソン・テュニス、ナラ・レブロン

オリジナルキャスト
ファビオ・クレイゼ

照明デザイン
カリン・ゲアダ

音響技術
ジョアン・モンテイロ

技術監督
ルイサ・オソリオ

音楽
ジョアン・パイス・フィリペ、ルイス・ペスターナ

衣装
アレクサンダル・プロティッチ

舞台美術
エマニュエル・サントス

人類学研究
テレサ・フラディケ

フォークロアダンス
ジョアナ・ロペス

制作監督
マファルダ・バストス

制作
マファルダ・バストス、ジョアナ・コスタ・サントス

制作体制
ペンサメント・アブルソ

ディフュージョン
ART HAPPENS

© Guidance

ワークショップ

ダンス リフレクションズ by ヴァン クリーフ&アーペルは、継承と教育という指針を体現するものとして、振付に関するワークショップを開催し、各フェスティバルのプログラムをより充実させています。日本でのイベントでは、公演のために招聘されたアーティストたちがこうした場を活気づけ、観客とダンスコミュニティの交流を促進することを目指しています。

ダンスの世界では、継承は口頭でのコミュニケーションと身振りを通して行われます。京都と埼玉では、振付家とパフォーマーが教育者となり、参加者に振付のボキャブラリーとともにレパートリーからの抜粋を伝授します。

参加者の方々に、コンテンポラリーダンスの世界に没入し、生き生きと体験する機会を提供します。

「ラストダンスは私に」/ ©MAK

ルーム・ウィズ・ア・ヴュー
京都芸術センター（フリースペース）
10月4日 / 午前11時

会場
京都芸術センター
（フリースペース）

所要時間
2時間

対象者
どなたでもご参加いただけます（定員制）

お申し込みはこちらから
KYOTO-EX.JP

ナタン・ゴンベールとアヤ・サトウによるこのワークショップは、参加者に（ラ）オルドの作品の美学を発見し、その振付作品についての理解を深める機会を提供します。このワークショップでは、2020年にローンと（ラ）オルドがマルセイユ国立バレエ団と共同で制作した作品「ルーム・ウィズ・ア・ヴュー」のグランドフィナーレの伝授に焦点を当てます。ローンの音楽とともに振付が伝えるもの――それは、世界の無限の暴力に圧倒されつつも、それを払いのけるかのように肉体で再現し、陽気ながら闘争的でもあるコミュニティでの団結を図る若い世代の正当な怒りの物語です。

© ティエリー・パウスヴァルト

ラストダンスは私に
京都芸術センター（講堂）
10月6日 / 午後1時

会場
京都芸術センター
（講堂）

所要時間
2時間

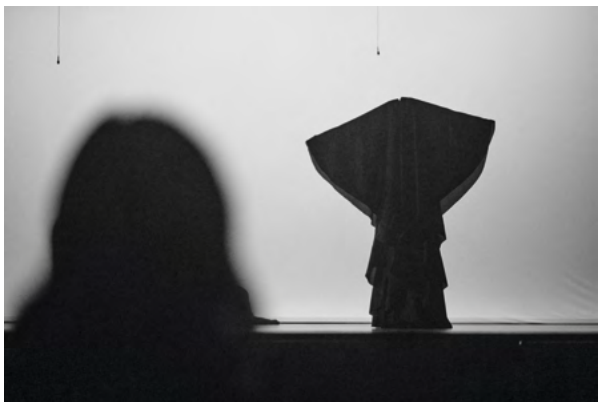
対象者
どなたでもご参加いただけます（定員制）

お申し込みこちらから
KYOTO-EX.JP

1900年代初頭にボローニャで生まれた求愛のダンス、ポルカ・キナータが、アレッサンドロ・シャッローニの「ラストダンスは私に」および、ダンサーのジャンマリア・ボルジローとジョバンフランセスコ・ジャンニーニが率いるこのワークショップで復活を遂げます。その目的は、参加者をポルカ・キナータの熟練ダンサーに育てることではなく、共同体意識を醸成し、この古いダンスのステップをできるだけ多くの人に伝えることです。このダンスを継承し、今日においても意義あるものとするためのプロジェクトです。

© MAK

ボンビックス・モリ
京都芸術センター（フリースペース）
10月9日 / 午後7時



会場
京都芸術センター
（フリースペース）

所要時間
2時間

対象者
どなたでもご参加いただけます（定員制）

お申し込みこちらから
KYOTO-EX.JP

ロイ・フラーが創作した象徴的なサーペンタインダンスに基づいたワークショップと実験の場で、参加者は、このユニークなダンスがどのように踊られるかを観察します。「ボンビックス・モリ」を解釈するダンサーとともに、メタモルフォーシス（変身）というテーマにインスパイアされた視覚的、律動的、彫刻的な世界に浸ってください。

© リンジー・モリス

D'APRÈS UNE HISTOIRE VRAIE—本当にあった話から

京都芸術劇場 春秋座
10月13日 / 午前10時

会場
京都芸術劇場 春秋座

所要時間
2時間

対象者
何らかのトレーニングを受けているダンサーやパフォーマー / ダンスを学ぶ学生（定員制）

お申し込みこちらから
KYOTO-EX.JP

クリスチャン・リゾーが主導するこの2時間のワークショップは、グループとして、共有するダンスの空間性をめぐる即興の原理を刺激することを目的としています。周囲の空間や他者の身体を知覚することが、どのようにして振付というフィクションの始まりを形作るのでしょうか? 参加者は、自らダンスに加わることと他者のダンスを観察することとを交互に繰り返しながら、同じ動きの中に、独自性と他者性の両方を受け入れていきます。

彩の国さいたま芸術劇場（大練習室）
10月18日 / 午後1時

会場
彩の国さいたま芸術劇場（大練習室）

所要時間
4時間

対象者
どなたでもご参加いただけます（定員制）

お申込みはこちらから
SAF.OR.JP/ARTHALL/

このワークショップでは、ファビアン・アルマキウィックの指導のもと、個人およびグループでの実践的な演習を通じて、参加者は、自身の身体のさまざまな側面を探求します。また、「*D'après une histoire vraie*—本当にあった話から」からの抜粋に基づいた即興にも取り組みます。このワークショップにおいて、ダンスは言語となり、学びの空間となり、また、世界を観察し、コミュニケーションをとる方法となります。

© パトリック・バーガー

ソープオペラ、インスタレーション
京都芸術センター（フリースペース）
10月19日 / 午前11時

会場
京都芸術センター
（フリースペース）

所要時間
6時間

対象者
ダンス経験者（定員制）

お申し込みはこちらから
KYOTO-EX.JP

京都で開催されるこのワークショップでは、振付家のマチルド・モニエによって、参加者は彼女の振付のレパートリーに浸ることになります。ウォーミングアップと動きについての技術的な指導の後、彼女の作品からいくつかの素材を共有し、ダンサーたちはこれらの要素を即興で使いながら、振付の抜粋を自分のものにしていきます。

© マルク・クードレ

CORPS EXTRÊMES—身体の極限で

ラシッド・ウランダン振付の「*Corps extrêmes—身体の極限で*」は、芸術とスポーツの間にある特権的なつながりを考察しています。この2つを組み合わせたワークショップでは、パフォーマンス、超絶技巧、肉体的・精神的準備、競争、回復力、限界の突破——すなわち、動きを通じて人生を謳歌するというアイデアを探求します。

彩の国さいたま芸術劇場（大練習室）
10月27日 / 午後5時30分
ロームシアター京都（ノースホール）
10月29日 / 午後6時

会場
彩の国さいたま芸術劇場
（大練習室）

所要時間
2時間

対象者
ダンス経験者
（定員制）

ご登録はこちらから
SAF.OR.JP/ARTHALL/

会場
ロームシアター京都
（ノースホール）

所要時間
3時間

対象者
初心者
（定員制）

お申込みはこちらから
ROHMTHEATREKYOTO.
JP/TICKETS/GUIDE/

「*Corps extrêmes—身体の極限で*」の2人のアクロバット、マキシム・セガースとタミラ・デ・ネイヤーが指導するアクロバットダンスのワークショップで、空中舞踊の美しさを発見してください。アクロバットダンスを通して、他者との信頼や関係性の概念を探ります。このワークショップは、さまざまな経験レベルのダンサーを対象とし、ハンド・トゥ・ハンドによるアクロバティックなリフトの基本とともに、参加者に無重力や宙吊りの状態を体験してもらうことに重点を置いています。希望に応じて、しなやかさや軽快さを追求しながら、担ぎ手または飛び手の感覚を発見していきましょう。

ロームシアター京都（ノースホール）
10月30日 / 午後6時

会場
ロームシアター京都
（ノースホール）

所要時間
3時間

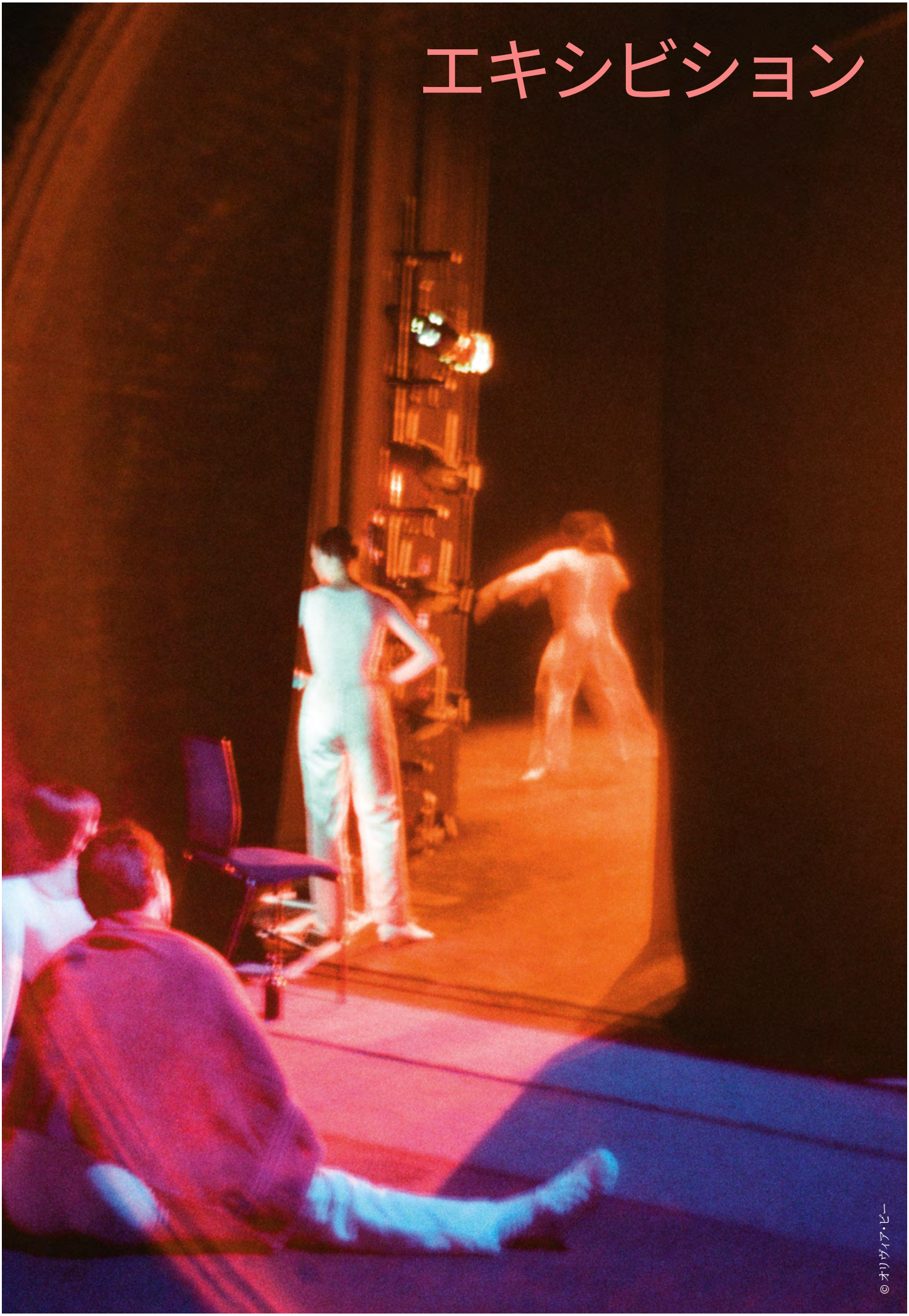
対象者
初心者（定員制）

お申込みはこちらから
ROHMTHEATREKYOTO.
JP/TICKETS/GUIDE/

ラシッド・ウランダンの振付アシスタントであるアニー・ハナウアーが指導するこのコンテンポラリーダンス・ワークショップでは、地上と空中をつなぐ振付を通して空を飛ぶ感覚を体験します。ほかの参加者と密接に協力し合い、動きを形作っていきます。自身を解き放つことで、ダンスを通して重力を探求する方法を学び、無重力の感覚を獲得し、自分の身体能力を探ります。グループで協力し、触覚と平衡感覚を駆使しながら、自身をつながりのある有機体へと変えていきます。感覚と知覚を目覚めさせ、自分の身体の中に存在することで、いずれは完全に自信をもって、一緒に動くことができるようになるでしょう。

© パスカル・ショレット

エキシビション



© オリヴィア・ビー

その部屋で私は星を感じた
ASPHODEL（アスフォデル）ギャラリー、京都
10月4日 — 11月16日

会場
ASPHODEL（アスフォデル）ギャラリー、京都

アクセス
入館無料
火曜日〜日曜日
午後12時〜午後9時まで
月曜休業

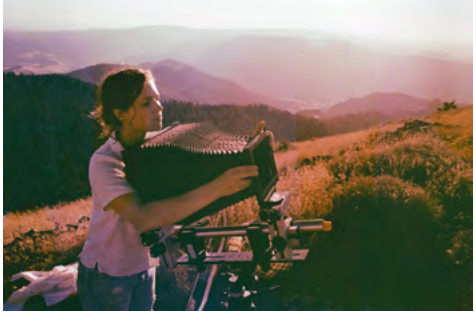
ダンス リフレクションズ by ヴァン クリーフ&アーペルは、フェスティバルのオープニングとして、KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭と共同で、アメリカ人写真家オリヴィア・ビーの作品を紹介します。2024年10月4日から11月16日まで、「*その部屋で私は星を感じた*」展が京都にて開催されます。

このプロジェクトは、ダンス リフレクションズが指針とする3つの価値観——創造、教育、継承——に基づいたプログラムを展開するフェスティバルの最初の数年間を通して実現しました。フェスティバルでは、数週間にわたり、国際的なモダンダンスとコンテンポラリーダンスの振付作品、その歴史と文化を展望できるパフォーマンスが展開されています。さらに、アーティストが主導するワークショップでは、アマチュアとプロを問わず一般の方々と作品を共有し、交流を促進しています。

この写真展は、ロンドン（2022年3月）、香港（2023年5月）、ニューヨーク（2023年10月）で開催された初回から第3回までのフェスティバルで撮影されたアナログ写真をまとめたものです。オリヴィア・ビーは、これらのイベント中、振付家とダンサーを舞台上でも舞台外でも、日々追い続けました。その成果が、一瞬の動きと美しさを捉えた写真シリーズです。京都のAsphodel（アスフォデル）ギャラリーで展示されるプリントの数々は、鑑賞者がダンサーの日常に入り込んだように感じられる内装で展示されます。リハーサルホールからステージまで、これら3回にわたるダンス リフレクションズ by ヴァン クリーフ&アーペル フェスティバルの舞台裏をお楽しみください。

「*その部屋で私は星を感じた*」は、コンテンポラリーダンスと写真という2つの芸術分野間の豊かな対話を物語っています。

撮影に協力した振付家
カテリーナ・アンドレウ、
トリシャ・ブラウン、
ルシンダ・チャイルズ、
アンヌ・テレサドゥ・ケースマイケル、
（ラ）オルド、オラ・マチェイェフスカ、
ドロテ・ムニアネザ、
ラシッド・ウランダン、
クリスチャン・リゾー、
ノエ・スーリエ、
ジゼル・ヴィエンヌ、
ラウフ・“ラバーレッグス”・ヤシット、ブリゲル・ジョカ



オリヴィア・ビー
写真家・映画監督のオリヴィア・ビーは、仕事のために世界中を旅しているとき以外は、米国オレゴン州西部のアンプクア・バレーにて家族とともに60エーカーの農地を管理しています。日常生活の魔法、人間と土地との本質的なつながり、彼女は、思い出（現実であれ想像であれ）の美しさがどのように感動をもたらすのかということに関心を抱いています。2016年、22歳の時にモノグラフ「*Kids in Love*」を発表し、写真文化のプラットフォームを担う非営利機関アパチュア・ファウンデーションから作品集を出版した最年少のアーティストとなりました。この作品は、ニューヨークのアパチュア・ファウンデーションとアニエス・ベーで開催された個展で展示されました。彼女の作品は、ダンジガー・ギャラリー、アパチュア・ファウンデーション、ワインスタイン・ギャラリー、ベルナル・エスパシオ・ギャラリー、ヴァン　クリーフ&アーペルのグループ展でも展示されています。彼女は、「Forbes 30 under 30」、「PDN 30 Under 30」、「Flickr 20 Under 20」を受賞するとともに、『*Outside*』誌での活動に対して米国旅行作家協会から特別賞を贈られています。

© ジェセフ・ヘルン

パートナー
＆共同主催

KYOTO EXPERIMENT
京都国際舞台芸術祭 2024

KYOTO EXPERIMENT

KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭は、**2010**年より京都で開催している舞台芸術のフェスティバルです。「**EXPERIMENT**（エクスペリメント）＝実験」的な舞台芸術を創造・発信し、芸術表現と社会を、新しい形の対話でつなぐことを目指しています。フェスティバルは、今年で**15**周年を迎えます。世界各地の実験的な舞台芸術を上演する「**Shows**」、フェスティバルが根ざす関西地域をアーティストの視点で探究し、未来の創造的な土壌を育む「**Kansai Studies**」、実験的な舞台芸術とアートの枠を超えたさまざまなトピックとの関係性をひも解くトークやワークショップが体験できる「**Super Knowledge for the Future** [**SKF**]」の**3**つのプログラムで構成されています。

© 小池アイ子

彩の国さいたま芸術劇場

SAITAMA
ARTS
THEATER

1994年に開館した彩の国さいたま芸術劇場は、日本を代表する舞台芸術専門劇場のひとつです。

2022年4月より芸術監督を務める近藤良平氏のもと、「Art for Life」をビジョンに掲げ、国内外の革新的で優れた舞台作品を上演しています。首都圏の舞台芸術をけん引する存在であり、特にコンテンポラリーダンスの分野では、全国からプロフェッショナルやダンス愛好家を引きつけています。

また、自主公演や共同制作を通じて、埼玉から日本全国、さらには世界へ多彩な舞台芸術を発信しています。近年では、舞台芸術の次世代への継承や若手ダンサー・アーティストの継続的な育成プロジェクトの立ち上げなど、ダンス文化のさらなる発展にも積極的に寄与しています。

© 小川重雄

ロームシアター京都

ロームシアター京都
ROHM Theatre Kyoto

ロームシアター京都は、芸術文化の創造と発信の拠点として、文化都市として知られる京都のさらなる発展に貢献することを目指しています。公演を行うホールだけでなく、コミュニティの賑わいを創出する新たな施設も併設するなど、人々の暮らしに寄り添う芸術体験を提供する空間を中心に、これまで以上に開かれた場へと生まれ変わりました。

ロームシアター京都は、2016年のリニューアルオープン以来、「創造」「育成」「交流」「生活」の4つの要素を柱に、京都の新たな演劇文化を形作っています。

© ヤスシ・イチカワ

KYOTOGRAPHIE
京都国際写真祭

KYOTO GRAPHIE international photography festival

KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭は、京都を舞台に毎年開催される国際的な写真フェスティバルで、視覚的なストーリーテリングを称える独自の祭典として知られています。**2013**年に創設され、多様な視点と物語性の提示に注力している点で、国際的に高い評価を得ています。

KYOTOGRAPHIEは、伝統的な *町*家、寺院、美術館などの会場を革新的な空間演出で変貌させることで、鑑賞者が新進気鋭の写真家から著名な写真家までその作品世界に没入できる環境を提供しています。また、数多くの職人やデザイナーとのコラボレーションにより、写真展の中で印象的なインスタレーションを実現しています。

写真家のための活発なプラットフォームとして、**KYOTOGRAPHIE**は、ポートフォリオレビュー、マスタークラス、アワードなどさまざまな機会を提供し、展覧会や国際的なレジデンシー・プログラムを通じて、写真家の認知を高める支援を展開しています。

© オリヴィア・ピー

アーティスト略歴

アレッサンドロ・シャッローニ

アレッサンドロ・シャッローニは、2007年以来、舞台芸術と視覚芸術を融合した作品を手掛けています。美術教育を受けるとともに、舞台での豊富な経験を誇る彼は、概念的かつ演劇的なアプローチを採り、ダンスに加え、スポーツやサーカス芸術などの関連分野から派生したテクニックや実践を取り入れています。彼の作品は、ダンサーの身体的持久力を試すような実践の反復に基づき、パフォーマンスの強迫観念、恐怖、脆弱さを明らかにしようとするもので、新たな時間の次元と、パフォーマーと観客の間の共感的な絆を生み出そうとしています。さまざまな国際的な芸術プロジェクトやネットワークに貢献するアレッサンドロ・シャッローニは、定期的に招聘され、世界中で作品を発表しています。2019年のヴェネツィア・ビエンナーレ・ダンツァでは、ダンス分野での生涯功労賞として金獅子賞を受賞しました。アレッサンドロ・シャッローニは、パリのサン・キャトルおよびミラノ・トリエンナーレ・テアトロ2022-2024の提携アーティストとなっています。

（ラ）オルド

2013年に結成された（ラ）オルドは、マリーヌ・ブルッティ、ジョナタン・デュブルワー、アルチュール・アレルで構成されるアーティスト集団です。3人はいずれも、舞台芸術や現代美術の分野を中心に、さまざまな芸術分野のコードに疑問を投げかけています。（ラ）オルドは、2019年9月よりマルセイユ国立バレエ団の監督を務め、動く身体にフォーカスした振付作品、映画、ビデオインスタレーション、パフォーマンスを制作しています。彼らは複数のメディアを用い、現代の事象に根差したシナリオやアクションを展開し、それらをさまざまな物語空間に組み込みます。また高齢者、視覚障害者、喫煙者、思春期の若者など、社会の主流から疎外された人々のコミュニティと連携し、芸術的な連帯を組む旅に乗り出しています。彼らはあらゆる形態のヒエラルキーと文化の盗用に反対し、相互の結びつきや協力に重点を置く一方、不安と探究心を抱え常に警戒態勢を敷いています。彼らの創作の中心にあるのは、身体です。インターネットの出現以来ダンスがどのように進化してきたかを定義するために、さまざまなオンラインコミュニティからインスピレーションを得た作品を制作していますが、それらの作品を説明する際に「ポストインターネットダンス」という用語を使用しています。

© アレッサンドロ・チェッキ / ベンジャミン・マラブリス

オラ・マチェイェフスカ

オラ・マチェイェフスカは、アーティスト、ダンサー、振付家として活動しています。彼女の作品は、リサーチと緻密な構成に基づく、ダンスについての説得力のある学際的な解釈によって特徴づけられています。ダンスとビジュアルアートの融合に取り組む中から着想を得て、ダンス史を批評的に読み解く作品を制作しています。2013年からは、1890年代にロイ・フラーによって考案された象徴的なサーペンタインダンスを再解釈し、独自の振付法を発展させています。彼女の舞台作品「*ロイ・フラー：リサーチ*」と「*ボンビックス・モリ*」は、変容、共感覚、ハイブリッドな身体性について観客に熟考を促します。2016年から2018年まで、ノルマンディのカーン国立振付センターのアソシエイトアーティストを務め、2020年には、ピナ・バウシュ財団のアーカイブにてロルフ・ボルツィクの舞台美術に関する研究に取り組みました。2022年、ロバート・ウィルソンが設立したウォーターミル・センターから特別研究員の地位を得ています。彼女は、ジュネーヴ造形芸術大学（HEAD）、リモージュ国立高等美術学校、国立ダンスセンターを筆頭に、自身の研究を共有するためのフレームワークを構築しています。また、時間、耐久性、彫刻性を探求する多面的なソロ作品である「***Figury（Przestrzenne）***」を初演しました。2023年、パリ国立高等美術学校のエマニュエル・ユインのアトリエに所属する学生のために、彼らと共同で「***ON TIME***」を制作しています。2024年には、パフォーマーと氷の彫刻とのデュエットパフォーマンスで、人間と自然の要素との壊れやすい関係の寓話を描いた「***The Second Body***」を初演しました。現在は、ダンス リフレクションズ by ヴァンクリーフ&アーペルの支援を受け、ダンスとビジュアルアートの融合と継承に焦点を当てた、サーペンタインダンスを巡るより大規模な作品に取り組んでいます。

クリスチャン・リゾー

クリスチャン・リゾーは、ロックバンドを結成し、ファッションブランドを立ち上げるなど、トゥールーズでアーティストとしてのキャリアをスタートさせました。その後、ニース国立高等美術学校ヴィラ・アルソンで美術を学びます。1990年代に予想外の転身を遂げ、ヨーロッパ各地でコンテンポラリーの振付作品を数多く上演し、時には、こうしたプロダクションのサウンドトラックや衣装のデザインも手掛けました。1996年に、パフォーマンス、インスタレーション、ソロダンス、グループダンスを創作するほか、オペラ、ファッション、美術関連の機関から委託されたプロジェクトを遂行するためのプラットフォームとなる組織、Fragileを設立しました。以来、約40作品を実現し、フランス国内外の美術学校やコンテンポラリーダンス専門の教育機関などでも定期的に教鞭を執っています。2015年には、モンペリエ／オクシタニー地域圏国立振付センターの運営を引き継ぎました。クリスチャン・リゾーは、振付家、ビジュアルアーティスト、キュレーターとして、空間と人間の身体との間の柔軟性と緊張感を表現すべく、弛まぬ努力を続けています。

© オラ・マチェイェフスカ スタジオ / ICI—CCN デニス・オリヴィエ=フィエロ

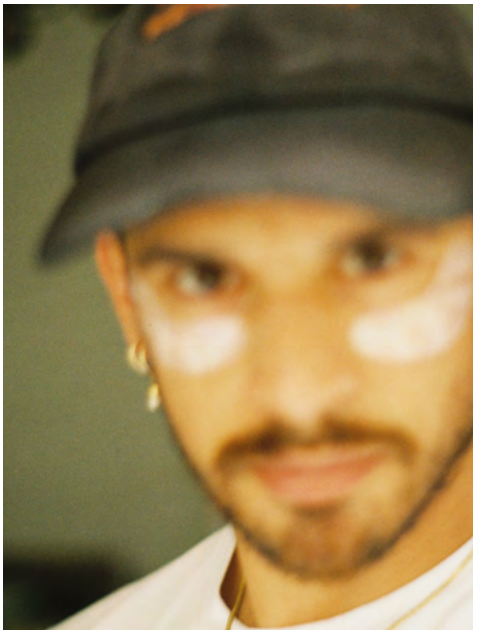
マチルド・モニエ

マチルド・モニエは、フランスと国際的なコンテンポラリーダンスのシーンの双方において、重要な地位を占めています。作品を発表するごとに常に期待を超えて進化し続けています。1994年にモンペリエ／ラングドック=ルシヨン国立振付センターの美術監督に就任したことを機に、さまざまな芸術分野の第一人者（ジャン=リュック・ナンシー、カトリーヌ、クリスティーヌ・アンゴ、ラ・リボ、ハイナー・ゲッベルスなど）との一連のコラボレーションに着手しました。これまでに40を超える振付作品を創作し、アヴィニョン演劇祭やパリ市立劇場をはじめ、ニューヨーク、ウィーン、ベルリン、ロンドンなどの主要な国際舞台で公演され、数々の賞（文化省賞、SACD賞）を授与されています。パリのフランス国立ダンスセンターの総合演出監督を経て、2019年に自身の創作活動を再開したマチルド・モニエは、ラ・リボとティアゴ・ロドリゲスとの共同制作による「*Please Please Please*」（2019年）、「*Records*」（2021年）、最新作品「*Black Lights*」（2023年）などの作品を発表しています。2020年以降、マチルド・モニエとそのカンパニーは、フランス、モンペリエのアル・トロピズムのレジデンシーに招聘されています。

ラシッド・ウランダン

ラシッド・ウランダンは12歳の時に、ヒップホップを介してダンスに目覚めました。その後、クラシックダンスとモダンダンスの集中講座も受講した経験があります。1990年代初頭、フルタイムでダンスに専念するため生物学の勉強を中断し、アンジェ国立現代舞踊センターに入ります。ラシッド・ウランダンの作品には、しばしば難民の子どもたちや自然災害の被災者などの劇的もしくは例外的な状況に関する証言や個人的経験が織り込まれており、こうした要素から彼ならではの構造化された振付が紡がれています。彼は、自身の作品のみならず、委託作品、ワークショップなどにおいても、サーカスアーティスト、作家、ビジュアルアーティスト、ミュージシャンとのコラボレーションを展開しています。2021年より、パリのシャイヨー国立舞踊劇場のディレクターを務め、多様性とホスピタリティに基づく意欲的なプロジェクトを率いています。

© マルク・クードレ／ジュリアン・ベナムー



マルコ・ダ・シウヴァ・フェレイラ

マルコ・ダ・シウヴァ・フェレイラは、ポルトガルのサンタ・マリア・ダ・フェイラで生まれ、2008年にプロのパフォーマーとして活動を開始しました。当初は、ホフェッシュ・シェクター、アンドレ・メスキータ、ティアゴ・ゲデスといった振付家とコラボレーションしていましたが、2010年代前半に振付家としての自身の地位を確立し、数々の国際フェスティバルで取り上げられた「*HU(R)MANO*」（2013年）で高い評価を得ます。以降、「*Brother*」（2017年）、「*Bisonte*」（2019年）、ポルトガル人映画監督のホルヘ・ジャコメとのコラボレーション作品「*SIRI*」（2021年）、「*førm In�ms*」（2022年）、さらに最近では「カルカサ」を制作しています。マルコは、ポルト市立劇場（2018年〜2019年）、ノルマンディのカーン国立振付センター（2019年〜2021年）にて、提携アーティストを務めました。

© マルコ・ダ・シウヴァ・フェレイラ

カレンダー

公演

10月5日	午後4時	ラストダンスは私に	アレッサンドロ・シャッローニ	KAC（講堂）
	午後6時	ルーム・ウィズ・ア・ヴュー	（ラ）オルド、ローン with マルセイユ国立バレエ団	RTK（サウスホール）
10月6日	午後4時	ラストダンスは私に	アレッサンドロ・シャッローニ	KAC（講堂）
	午後6時	ルーム・ウィズ・ア・ヴュー	（ラ）オルド、ローン with マルセイユ国立バレエ団	RTK（サウスホール）
10月11日	午後7時	ボンビックス・モリ	オラ・マチェイェフスカ	RTK（ノースホール）
10月12日	午後4時30分	ボンビックス・モリ	オラ・マチェイェフスカ	RTK（ノースホール）
	午後7時	D'APRÈS UNE HISTOIRE VRAIE—本当にあった話から	クリスチャン・リゾー	京都芸術劇場 春秋座
10月13日	午後7時	D'APRÈS UNE HISTOIRE VRAIE—本当にあった話から	クリスチャン・リゾー	京都芸術劇場 春秋座
10月14日	午後6時30分	ロイ・フラー：リサーチ	オラ・マチェイェフスカ	KAC（講堂）
10月18日	午後7時	ソープオペラ、インスタレーション	マチルド・モニエ＆ドミニク・フィガレラ	RTK（ノースホール）
10月19日	午後7時	ソープオペラ、インスタレーション	マチルド・モニエ＆ドミニク・フィガレラ	RTK（ノースホール）
	午後7時	D'APRÈS UNE HISTOIRE VRAIE—本当にあった話から	クリスチャン・リゾー	SAT（大ホール）
10月20日	午後3時	D'APRÈS UNE HISTOIRE VRAIE—本当にあった話から	クリスチャン・リゾー	SAT（大ホール）
	午後4時	ソープオペラ、インスタレーション	マチルド・モニエ＆ドミニク・フィガレラ	RTK（ノースホール）
10月26日	午後7時	CORPS EXTRÊMES—身体の極限で	ラシッド・ウランダン	SAT（大ホール）
10月27日	午後3時	CORPS EXTRÊMES—身体の極限で	ラシッド・ウランダン	SAT（大ホール）
11月2日	午後7時	CORPS EXTRÊMES—身体の極限で	ラシッド・ウランダン	RTK（サウスホール）
11月3日	午後3時	CORPS EXTRÊMES—身体の極限で	ラシッド・ウランダン	RTK（サウスホール）
11月15日	午後7時	カルカサ	マルコ・ダ・シウヴァ・フェレイラ	RTK（サウスホール）
11月16日	午後3時	カルカサ	マルコ・ダ・シウヴァ・フェレイラ	RTK（サウスホール）

ワークショップ

10月4日	午前11時〜午後1時	ルーム・ウィズ・ア・ヴュー	ネイサン・ゴンバート、アヤ・サトウ	KAC（フリースペース）
10月6日	午後1時〜午後3時	ラストダンスは私に	ジャンマリア・ボルジロー、ジョバンフランセスコ・ジャンニーニ	KAC（講堂）
10月9日	午後7時〜午後9時	ボンビックス・モリ	オラ・マチェイェフスカ	KAC（フリースペース）
10月13日	午前10時〜午後0時	D'APRÈS UNE HISTOIRE VRAIE—本当にあった話から	クリスチャン・リゾー	京都芸術劇場 春秋座
10月18日	午後1時〜午後5時	D'APRÈS UNE HISTOIRE VRAIE—本当にあった話から	ファビアン・アルマキウィック	SAT（大練習室）
10月19日	午前11時〜午後5時	ソープオペラ、インスタレーション	マチルド・モニエ	KAC（フリースペース）
10月27日	午後5時30分〜午後7時30分	CORPS EXTRÊMES—身体の極限で	マキシム・セガース＆タミラ・デ・ネイヤー	SAT（大練習室）
10月29日	午後6時〜午後9時	CORPS EXTRÊMES—身体の極限で	マキシム・セガース＆タミラ・デ・ネイヤー	RTK（ノースホール）
10月30日	午後6時〜午後9時	CORPS EXTRÊMES—身体の極限で	アニー・ハナウアー	RTK（ノースホール）

ポストパフォーマンストーク

振付家と出演者、いずれかが参加

10月6日		ラストダンスは私に	アレッサンドロ・シャッローニ	KAC（講堂）
		ルーム・ウィズ・ア・ヴュー	（ラ）オルド、ローン with マルセイユ国立バレエ団	RTK（サウスホール）
10月12日		ボンビックス・モリ	オラ・マチェイェフスカ	RTK（ノースホール）
10月13日		D'APRÈS UNE HISTOIRE VRAIE—本当にあった話から	クリスチャン・リゾー	京都芸術劇場 春秋座
10月20日		D'APRÈS UNE HISTOIRE VRAIE—本当にあった話から	クリスチャン・リゾー	SAT（大ホール）
		ソープオペラ、インスタレーション	マチルド・モニエ	RTK（ノースホール）
10月27日		CORPS EXTRÊMES—身体の極限で	ラシッド・ウランダン	SAT（大ホール）
11月3日		CORPS EXTRÊMES—身体の極限で	ラシッド・ウランダン	RTK（サウスホール）

会場および予約

KYOTO EXPERIMENT チケットセンター

〒604-0862京都市中京区烏丸通夷川
上ル少将井町229-2 第7長谷ビル 6F
電話：075-213-0820

ロームシアター京都 チケットカウンター

京都市左京区岡崎最勝寺町13 1F
電話：075-746-3201

京都芸術センター

京都府京都市中京区室町通蛸薬師下る山伏山町546-2
電話：075-213-1000

京都芸術劇場 春秋座

京都市左京区北白川瓜生山2-116
電話：075-791-8240

彩の国さいたま芸術劇場 SAFチケットセンター

埼玉県さいたま市中央区上峰3-15-1
電話：0570-064-939

制作クレジット

ラストダンスは私に
制作
corpoceleste_C.C.00#、MARCHETEATRO
Teatro di Rilevante Interesse Culturale
共同制作
Santarcangelo Festival、B.Motion、
Festival Danza Urbana

ルーム・ウィズ・ア・ヴュー
初演2020年3月5日、シャトレ座
委嘱
シャトレ座、Decibels ProductionおよびInfine
共同制作
シャトレ座、マルセイユ国立バレエ団およびプロヴァンス大劇場
後援
ダンス リフレクションズ by ヴァン クリーフ&アーペル

ボンビックス・モリ
制作
キャロライン・レディ
協力
音響および照明の手配トマ・レグル、
ICK アムステルダム、ジュディス・ショーナベルト、
ニエンケ・ショルツ
共同制作
Ménagerie de Verre – パリ(仏)、Productiehuis
ロッテルダム(蘭)、Veem House for Performance (仏)、
国立ダンスセンター(仏)、
カーン国立振付センター(ノルマンディ)
「提携アーティスト」プログラムフレームワーク内
後援
エルメス財団
「ニュー・セッティングス」プログラム
フレームワーク内、
Vivarium Studio ナンテール アマンディエ
–国立演劇センター

ロイ・フラー:リサーチ
制作
So We Might as Well Dance
委託
TENT ロッテルダム(蘭)
後援
Zeebelt Theatre (蘭)
協力
ジュディス・ショーナベルト

D'APRÈS UNE HISTOIRE VRAIE—本当にあった話から
制作
ICI —モンペリエ/オクシタニー/ミディ=ピレネー地域圏国立振付センター/監督 クリスチャン・リゾー
共同制作
Bonlieu アヌシー国立舞台、
CENTQUATRE-PARIS
後援
ダンス リフレクションズ by ヴァン クリーフ&アーペル
協力
La Bulle Bleue E.S.A.T Artistique、モンペリエ

2013年
制作・編集
Bureau Cassiopée
共同制作
Fragile、パリ市立劇場 – パリ、アヴィニョン演劇祭、
リールオペラ座、トゥールーズ振付開発センター –ミディ=ピレネー、La Ménagerie de Verre –パリ、La Filature –ミュルーズ国立舞台、L'Apostrophe –セルジー=ポントワーズ・ヴァルドワーズ国立舞台、リリュー・ラ・パープ国立振付センター / 監督 ユヴァル・ピック
後援
ノール・パ・ド・カレー地域評議会、アンスティチュ・フランセおよびリール市協力、ボーマルシェアソシエーション – SACDおよびアンスティチュ・フランセ「サークル」制作フレームワーク内、Le Phénix – ヴァランス国立舞台
リハーサルレジデンシー
リールオペラ座、リリュー・ラ・パープ国立振付センター / 監督 ユヴァル・ピック、ルーベノール=パ・ド・カレー国立振付センター
協力
リールオペラ座、リヨンオペラ座、Théâtre du Nord、
Le Fresnoy –国立現代美術スタジオ、
CENTQUATRE-PARIS、マリー=テレーズ・アリエール、ロスタン・シェントゥフ、ソフィー・ラリー、アーサー・レフォール、フレデリック・ボンヌメゾン、キャスリーン・ツェケニ、ステファーヌ・マルフェテス

ソープオペラ、インスタレーション
共同制作
ポンピドゥー・センター – パリ、およびモンペリエ/オクシタニー地域圏国立振付センター
マチルド・モニエの一団はDRAC オクシタニー後援

CORPS EXTRÊMES—身体の極限で
制作
シャイヨー国立舞踊劇場
共同制作
CCN2 – グレノーブル国立振付センター、Bonlieuアヌシー国立舞台、パリ市立劇場 – パリ、モンペリエ ダンスフェスティバル 2021、L'Estive – フォワ・アリエージュ国立舞台、Le Bateau Feu –ダンケルク国立舞台、Le Carreau –フォルバック国立舞台、MC2: グルノーブル、Théâtre Molière –セート、タウ諸島国立劇場 、Le Théâtre、サン・ナゼール国立劇場
後援
ダンス リフレクションズ by ヴァン クリーフ&アーペル
協力
パトリシア・マインダー、ザビエル・メルモッド、
ギヨーム・ブラースト、ロマン・コシェリル
技術支援
Espace Vertical et de Music Plus、グレノーブル
後援
MC93 –セーヌ=サン=ドニ文化会館

カルカサ
共同制作
ポルト市立劇場、ベレン文化センター、Big Pulse Dance Alliance共同制作 New Baltic Dance (リトアニア)、Julidans (蘭)、Tanz im August/HAU Hebbel am Ufer (独)、ダブリン・ダンス・フェスティバル (アイルランド)、およびONE Dance Week (ブルガリア)、共同出資者「クリエイティブ・ヨーロッパ」プログラム、ノルマンディー国立振付センター(ノルマンディ)、La Briqueterie –ヴァル=ド=マルヌ、Maison des Arts(クレテイユ)、KLAP – Maison pour la Danse、CCN マルセイユ国立バレエ団、Charleroi danse、ワロン振付センター –ブリュッセル、December Dance (Concertgebouw and Cultuurcentrum Brugge)、La Rose des Vents –リール・メトロポリス国立舞台 –ヴィルヌーヴ・ダスク、TANDEM国立舞台 アラス・ドゥエー
後援
República Portuguesa – Cultura、
DGARTES –芸術総局
芸術レジデンシー
A Oficina、マルセイユ国立バレエ団、高等ダンススクール、O Espaço do Tempo、ポルト市立劇場

アクセス
ヴァン クリーフ&アーペルのプレスラウンジは
以下のアドレスでご覧いただけます：

presslounge.vancleefarpels.com/
dance-reflections/

アカウントをお持ちでない場合は、
オンラインにてご登録ください。
#vcadancereflections
#VCAdance
#vancleefarpels
@vancleefarpels

© Van Cleef & Arpels SA, June 2024.